

江古田小校長室便り 「温故創新」

H30(2018)・0220 NO99

校長 伊波喜一

通じない 言葉もどかし ジェスチャーを 交え 伝える 心が込もり

4年に一度開催される五輪は、スポーツを通じて世界が一つになる祭典である。国の威信をかけて競技に打ち込むが、戦い終われば互いの健闘をたたえ合う。この姿を見せるだけで、無言の教育となる。スポーツを含め、文化や芸術・教育の競い合いが、分断ではなく統合・発展に向かってゆくのは面白い。5・6年生の外国語活動の時間に、4名の外国の方の参観があった。出身国は違うが、日本に興味を持ち来日したとのこと。それぞれ、保育園で保育士として園児と接しているので、小学校の外国語活動がどのように行われているのか、興味津々だったようだ。ただ参観するだけでなく、子ども達のゲームに参加したりと参加型の授業となった。雑談の中で、彼らが日本のことを好印象として語っていた。「困っていると親切に教えてくれる」「なくした落とし物が返ってきた」「一生懸命さがいい」。何も、論理的に主張することだけが国際化ではない。たとえ言語は違えど、こちらの温もりが伝われば良い。相手の温もりを感じ取れば良い。江古田の子達にとり、良い出会いとなった。